

中国昔話の話型索引

—H—B—ヘルトの書評とT乃通の反論

加藤千代

はじめに

中国昔話の話型索引^①、FFCから出た次の二種があるいはよく知られるものである。

① W・H—B—ヘルト、一九三七『中国昔話の型』

Eberhard, Wolfram, Typen Chinesischer Volksmärchen. FFC

120. Helsinki, 437 pp (以下、『EB索引』と略称する。)

② T乃通、一九七八『中国昔話話型索引』

Ting, Nai Tong. A Type Index of Chinese Folktales in the Oral Tradition and Major Works of Non-Religious Classical

Literature. FFC 223, Helsinki 294 pp (以下、『TN索引』と略称す

③ 中国語訳本の『中国民間故事類型索引』は春風出版社版（一九八三、瀋陽、注^④）と中國民間文藝出版社版（一九八六、北京）がまた、一九八一年に劉魁立の長篇の論文「世界各国民間故事類型索引述評」（『民間文学論壇』創刊号、八一年五月）が発表され、ある。

両者は同じく中国昔話を対象としたながら、話型分類の方法が異なる。前者は中国昔話の特質にもとづく分類、後者はAT番号を基準とした分類である。両者の依拠する資料的側面を今日の眼でみると、いずれもかなりの限定をうけている。一九三六年作成のEB索引（資料出典は約三〇〇種、話数二九四）は地域的に東・南沿岸各省にかたよりがみられ、TN索引（資料出典は六〇〇種、延べ話数七三四四、表I、IIで後述）もまた一九六六年（文化大革命開始）以前の資料に限定される。

文革終結（一九七六）後すでに十年を経た今日、全国各地の出版社の自由化と隆盛にともない、各地から続々と昔話集が出版されている。ちなみに一九八一～八五の五年間に新たに発表された昔話の数は、昔話研究者として有名な劉守華の概算によれば、七千四百篇にのぼるという（注^②）。この話数は、わざわざTN索引の延べ話数七三〇〇に相当するから、最近五年間だけで中国昔話の活字資料数は倍加されたわけである。こうした現状から第三番目の話型索引が期待されるといふのである。

現在、中国では「三套集成」と呼ばれる、省単位の昔話、歌謡、諺話の三分野における集成の事業が一九八三年から進行中であり、一九九〇年をめどに完成せると云う。この「集成」の意味がどのレガリルのものか今の段階では外部からうかがい知れないが、その一つの昔話集成において、話型分類は時期尚早としてもなんらかの昔話分類が示されることになるだろう。この壮大なる事業を見越してすでに一九八一年に劉魁立の長篇の論文「世界各国民間故事類型索引述評」（『民間文学論壇』創刊号、八一年五月）が発表され、

それを皮切りに話型分類に關して論議がすすみつつあり、今では、A.T.の中國語訳も北京大学の翻訳グループですすめられているという。なお、文革以前は昔話の主題研究が重視され、話型研究は一種の形式主義として排斥されていたようである。

ともあれ、省単位の昔話集成の完成のあと、次の大事業として期待される第三の話型索引を考える際、先達ともいべき両索引は不可欠な理論的資料である。その意味でも両者をあわせ論じることの必要性を私は常々考えていた。幸いにも昨年、私のドイツ語の先生であり旧友でもあるロコバント・靖子さんから教えられて、エーバーハルトが東京の「O.A.G.通信」(O. A. G. Nachrichten 一二七一一二八、一九八〇)にTN索引の書評を載せて貰い、しかも丁乃通がそれへの反論(A. Reply to Professor Eberhard)を同通

信(一三三、一九八三)に寄せて貰ったことを知った。

この小論では、その書評と反論を紹介しつつ中国昔話の話型索引の問題点を考えてみたい。結論として私はエーバーハルトの主張を肯定するものであり、将来の第三の話型索引は、EB索引の延長線上にきづかれるものと推測する。中国ではこのところ昔話の比較分類方法をふくめて中国独自の新しい研究方法の探求がさけばれていが、このEB索引は、かつて一九三〇年代の中国における中国人による昔話研究のゆたかな成果を継承したものと私は考える。そこで本稿では第一節「前史」をとくにもうけてEB索引の作成過程とその背景を述べることにしたい。

一、前 史

中国の口承文芸研究は、一九三〇年代を迎えると、第三期の、いわば点から線への時期、つまり中心点から地方への拡散の時期に入っている。それは、一九二〇年代前半の北京大学『歌謡週刊』を母体とした第一期、二〇年代後半の中山大学(廣東)『民俗週刊』を軸とした第二期を経て、各地に続々と民俗学会が成立した時代である。その中心は、浙江省の杭州に一九三〇年に成立した中国民俗学会であった。その機関誌『民間月刊』(鍾敬文・妻子匡・陶茂康主編)にベルリンのエーバーハルトから妻子匡にあてた手紙が三通訳載されている。一卷二期(一九三三・二)に載った手紙にこんな一節がある。

「私はずいぶん前から、中国古今の神話・伝説資料の収集をしておりますが、それは将来それら資料をまとめて一冊の専門書にするためです。古代の資料は、たくさんの古籍からすでにかなりの分量をみつけ、また私の手元に少からずの、仏・英・独各国の研究者による著作があります。ところが、近代の資料となると、私達は今まで知るところがなかったのです」(愛堡ハルト「柏林通信」、傍点は筆者)

文中の「一冊の専門書」を、タイプ・インデックスと読むことができよう。エーバーハルトが若冠二十八歳でEB索引を完成させたその情熱はすでに二十代はじめに根ざしたものとみてとれる。彼はこの年(一九三三年)に博士論文『漢代の天文学と占星術』をベル

リン大学に提出し、翌三四四年に上海に赴く。彼の中国滞在（三五年帰國）の目的は、表向きは勤務先のベルリン人類学博物館（東アジア・北アジア課）のための民族的資料の蒐集であり、それゆえ獎学金を得たわけであるが、「略歴」（エーバーハルト七〇歳記念論文集）一九七九、注³）の中に「博物館のためにほとんど何も蒐集しなかった」とあるように、眞の目的は、先に引用した手紙に書かれたとおり、近代の昔話資料の収集であった。上海から杭州へ行き婁子匡と会い、文献資料の収集と同時に金華とその近郊で曹松葉の協力のもとに昔話の採集をしたのであった。詳しい月日はわからぬが、一九三四年その年に南京を経て北京に出、ドイツ語を教えてることからみて、採集に従事した期間は短かつたようである。

私は、EB索引を論じる際、彼の中国訪問時期が一九三四年であったことに注目したい。

中国の今世紀初頭から一九六〇年代までの民間文学研究をながめると、昔話研究が最も高揚したのは一九二八～三四年の七年間であると私は考える。エーバーハルトは従つて幸運にも中国人による成果を最大限吸収しうる時期に中國滯在を果したといえる。

中国昔話の分類に関しては、その嚆矢は、一八七六年にロンドンで出版された Dennys, N. B.: *The Folklore of China*（八分類、十七型、注⁴）までさかのぼれるようであるが、その後の遅々たる歩みが一挙に加速されて顯在化するが、じつは一九二八年であつた。この年の昔話関連事項の中からいわば三大トピックのみをあげておく。

三月、鍾敬文・楊成志訳『印歐民間故事型式表』（中山大学民俗

学会叢書第一冊）出版。これはC・S・バーン著『民俗学概論』一四の付録「印度欧羅巴民譚の型式」（七〇式、B・ゴールド作成J・ヤコブ改訂）の全訳である。出版後、贊否両論の反響を呼びおこした。「或人はひどく珍愛し、常に用ゐて民譚の論文を執筆するに援引しなければならぬ『墳典』となした。また或人は却つて、ひどく軽蔑し全く無用のものとなし」たのである。（鍾敬文「中国民譚型式小引」角川源義訳 注⁵）

なお、日本でバーン女史の『民俗学概論』が岡正雄により全訳されたのが一九二七年であり、中国とほぼ足みなが重なる。ただ中国ではこの型式表のほか数章が訳されているものの全訳が出されたかどうか私は知らない。

四月、顧頡剛編著『孟姜女故事研究集』第一冊（第三冊が六月、第二冊が翌年二九年一月）出版。これは中国昔話の歴史的研究の先駆であると同時に今日なおこれを越えるものがないという存在である。八月、林蘭シリーズ全37冊の第一冊『巧舌婦的故事』出版（上海北新書局）。戦前の昔話資料はほぼこのシリーズに集約されており、このうち一冊を残して36冊が出そろつたのが、じつはエーバーハルトの訪中が実現した一九三四年であった。

中国での昔話研究の高揚期の下限を一九三四四年としたのは、ひとつには前述した林蘭シリーズの完結。ふたつには、この高揚期の実質的な牽引車であった鍾敬文（一九〇三年生れ、杭州の中国民俗学会の発起人の一人。現在北京師範大学教授）が日本留学（この年の春）のため杭州を離れたことがある。当時の説話研究の指導者は、歴史学者の顧頡剛（一九八三没）を別格として、鍾敬文の他に趙景

深（一九八四没）、婁子匡など若手研究者であったが、やはり鍾敬文には他の追随をゆるさないものがあった。

鍾敬文は一九二八～三三年の間に、十五篇にのぼる神話・伝説・昔話に関するインテンシングな論考を次々と公けにした（注6）。昔話に関しては、白鳥處女、蛇郎、老虎外婆（天道金の鎖）、狗耕田（花咲爺）、ガマ息子、タニシ婿などをはじめとする。

鍾敬文の当時の説話研究にましてより一層画期的意味をもつのが、彼の「中國民譚の型」（四十五型五十二式、一九三一、注7。なお、日語文では四十五タイプ、五十一式、注8。）である。この最初の中国昔話型索引は日本でも当時高い評価を得たものである。

ちなみに日本では、話型分類は同じ一九三〇年の柳田『日本昔話集』から三六年の柳田・閔『昔話採集手帳』（一〇〇型）に至る道のりがあり、これまた中国と歩みが重なるのである。しかし、話型分類の目的が日本では「採集標目」即ち「基準昔話の選定と名称の一一致を図ること」（『昔話採集の業』）、換言すれば比較研究以前の採集の手段として分類が用意されたのである。中国では、前世紀から西洋人による関連著作があり、また中山大学民俗学会『民間文芸』の発刊詞（一九二七）に外国との比較研究がもりこまれたように、その出発点から一足飛びに比較研究が話型分類の目的であったと考えられる。したがって、中国における昔話の比較は、こうした歴史的な下地があることから、今後、急速かつ大胆に進展するのではないだろうか。

鍾敬文は三四四年日本に赴いたあと、フランス社会学に傾倒し、残念ながら話型分類の興味を失っている（注9）。

ところで、エーバーハルトは、中国行きの前年一九三三年に鍾敬文に手紙を送り、「貴方の著作から学ぶところがたいへん多かった」と感謝の意を表わし、とりわけ中国白鳥處女説話の論考に對して「貴方の論究はきわめて正しいと私は考えます。また貴方の導き出した結論に私は全く同意します」と述べている（注10）。

E B 索引を論ずる際、鍾敬文の当時の研究業績を無視するわけにはいかない。鍾の昔話研究はいずれをとっても、資料の歴史的溯源、地域的分布、国内外の通時的共時的比較を論究したものである。エーバーハルトが索引を後述するような詳密さをもつて作成した背後に、鍾敬文の仕事という影の力があつたことは否定できないのである。

丁乃通は、自分の索引の中で E B 索引をとりあげなかつた理由の第一点として、「E B 索引が鍾敬文をはじめとする中国人研究者の成果を、十四タイプ、二十四ヶ所のストーリイ・エレメントにわたり、そつくり借用しているから」とその反論の中で述べている。私は、しかしながら、エーバーハルトが当時の中国昔話研究の高揚期の輝かしい成果を利用するには、借用であつても、索引作成という性格からいって当然のことであり、丁乃通の如く批難するにはあたらないと考える。逆に、丁乃通が自らの索引の中で徹徹尾 E B 索引を無視したことに対する感覚にはいかない。

ところで、エーバーハルトは一九三五年ドイツに帰国し、翌年ナチの追求をのがれて出国。米国・日本・中国を旅し、三七年トルコのアンカラ大学に赴任。十年後の一九四九年カルフオルニア大学に転出、一九七六年退職という道を歩む。

T N 索引の丁乃通の経験によれておく。彼は奇しくもエーバーハルトと縁の深い杭州生まれである。高等学校時代には先述の鍾敬文などの活動を知っていたという（注11）。一九三六年清華大学西方語文系卒業してアメリカに渡り、一九四一年ハーバード大学より英文学博士号を取得。一九六〇年から世界口承文芸の研究と指導をはじめる。現在、イリノイ大学で英米文学を担当。中国へは一九七八年以来しばしば訪問して口承文芸関係者に講演し、西方のこの分野の学者の中では最もよく知られる存在である（注12）。

一、両索引の紹介

両索引の数値的規模の比較は表I、IIのとおりである。各々の紹介は今さらながらの感もある。とくにT N 索引はATを基準としており多言を用しない。しかし一方のE B 索引に関しては、従来これといった紹介がないようだ。そこで次節の「書評と反論」を述べるうえで必要と思われる基礎事項を紹介しておくことにしたい。

E B 索引の構成は、第一部の話型索引と、付録にあたる第二部とからなる。第一部ではメリヒエンとシュバンクに大別し、第二部では、結論のあと①資料の出所（採集地點）と各地の話数の統計表②利用文献目録（漢字による目録も付ける）③事項索引（これはT N 索引のサブジェクト・インデックスに比べると極めて詳細なもの。例えば单一のテーマで竜とか狐をひけば各話型を縦断して説話におけるその全体像を追う端緒をつかむことができる。）④話型目次、とならべられている。

T N 索引の丁乃通の経験によれておく。彼は奇しくもエーバーハルトと縁の深い杭州生まれである。高等学校時代には先述の鍾敬文などの活動を知っていたという（注11）。一九三六年清華大学西方語文系卒業してアメリカに渡り、一九四一年ハーバード大学より英文学博士号を取得。一九六〇年から世界口承文芸の研究と指導をはじめる。現在、イリノイ大学で英米文学を担当。中国へは一九七八年以来しばしば訪問して口承文芸関係者に講演し、西方のこの分野の学者の中では最もよく知られる存在である（注12）。

話型は総数二百四十六型であるが、分類・排列についてエーバーハルトは序文で次のようにいう。

「分類は例えアールネの規準にしたがつたものではない。中国昔話の特質からして、内容的または性格的に共通した昔話をそのまま一緒にしておき、そのまとまりを分断してしまわない方が良いと思われる。」

この方針に沿ってメリヒエン部の二百十五型を以下の十七の見出しのものとに分類し排列している。（カッコ内は筆者のコメント。）

- (1) 「動物」一～七 (2) 「動物と人間」八～十九（以上は動物昔話にあたる） (3) 「動物や幽霊が悪人をくじき善人をたすける」二〇～三〇（隣の爺型にあたる。） (4) 「動物や幽霊が男または女と結婚」三一～四六（異類婚姻） (5) 「創造、世界のはじまり、最初の人間」四七～六五 (6) 「物と人間のはじまり」六六～九一、(5) と6は神話) (7) 「河神と人間」（竜や河神との斗い、人身御供など）九二～一〇二 (8) 「仙人と人間」一〇三～一一 (9) 「精靈と死靈と人間」一一二～一二四 (10) 「神々と人間」一二五～一四二 (11) 「地獄と再生」一四三～一四九 (12) 「神々と仙人」一五〇～一六八 (13) 「魔法、呪宝、魔法の作品」一六九～一八九 (14) 「人間」一九〇～二〇九 (15) 「英雄と神人」二一〇～二一五
なお、笑話三十、一型は(1)「愚か者」一～一〇 (2)「知恵者と狡猾者」一一～三一、の二つに分類されている。
- 以上のE B 索引の内容に対しても四点にわたり説明を加え、かつT N 索引と比べてみたい。
- (1) 対象。まず誰しも気づくことは、「メリヒエン」がきわめて広

表 I 両索引の比較

	B E 索引	T N 索引
話 型 数	246	843
話 数 *	2994	7344 **
資 料 (総数)	303	580
内 訳	27 92 (うち外国人編12, 外国の説話集9)	75 305 (うち外国人編 30)
雑 誌	23	18
説 話 集	174	113 ****
(民国以降)	6	39
研 究 書		
古 典 文 献		
そ の 他 ***		

* 各話型に明示された資料数（話の篇数）を集計したもの。

** ひとつの話が複数の話型に分割される例が多いため、この数はのべ話数である。

*** 便宜的に民国以前のものとした。

**** 語り物 14, 歌謡集 14, 不明 11

なお、資料の内訳については、個々に断わり書きを必要とするが、ここでは省略。予備的集計として概要を示すのみ。また、EB索引の数字は、加藤千代編『エーバーハルト『中国昔話の型』利用文献分類目録』(1975, 私家版)にもとすぐ。

表 II TN 索引の話型数・話数の内訳

動 物 昔 話	152 話 型	961 話
本 格 昔 話	341	3781
魔 法 昔 話	162	2296
宗 教 的 昔 話	32	262
ノ ヴ エ ラ	116	1082
おろかな悪魔	31	141
笑 話 と 小 話	335	2521
形 式 譚	13	66
分 類 で き な い 話	2	15

義につかわれていること。(1)・(2)の動物昔話、(3)・(4)の本格昔話のあと、神話がつづき、そのあとはほぼ伝説の類がなる。道教的説話、仮教説話も伝説として語られているゆえに、むろん対象となる。ちなみにエーバーハルトは序文において、本書の対象は民間に生きているものすべてであると記し、除外したものは①古典文芸から民間に流れ古典に依存する形で存在するアネクドーテ、②書物からのみ知られた仙人や寺院の由来に関する伝説、③仮教的な伝説や歴史の類で民衆に根ざさないもの。(4)戯曲(中国の歌劇はその多くが民間説話や歴史的事件を素材として独自に発展——筆者)、⑤現在では死んでいる昔話^{アラジン}の五種である。これによつてエーバーハルトがフォルクスメルヒエンの「ホルク」(民間、民衆)を対象選択の基準にしていたことがおのずと理解される。もっとも基準というには抽象的にすぎ、いわば原則である。これは丁乃通の目録のようにATを基準として入手の資料をふりあてるだけで、中国昔話に対する原則が明示されないので比べ、将来の第三の目録のためにはより有効的示唆的である。

(2)分類・配列。すでに引用したようにエーバーハルトは、アールネの分類にもとづかないと言う。しかし、作成時点の一九三六年は、トンプソンの補訂した『昔話の型』(FFC七四号)が発表(一九二八)されて十年を経ており、当然彼はそれを熟知していたはずである。彼の具体的な配列が(1)と(2)の動物昔話からはじまる。(3)隣の爺、(4)異類婚姻という魔法昔話の類を第一に置いたこと。神話のあと先述の如く様々な伝説類を大量に扱い、これはATの「宗教的な話」に該当すること、最後の(5)「英雄と神人」で二一〇「孟姜女」に該当すること、最後の(6)「英雄と神人」で二一〇「孟姜

女」(AT 8 8 8 * C)や二一一「梁山伯と祝英台」(AT 8 5 5 B)等をあげているのはATのノヴェラにあたること等、これによつて、EB目録の分類・配列の大綱は(5)(6)の神話群を対象としたことを除けば、ほぼATの影響のもとにそれにもとづいて作成されたと考えてよいようだ。

(3)項目。十七の項目「見出し」とその項目内の配列がきわめて便宜的であること。たとえば、「一つだけ例をだせば、(7)「河神と人間」に属する、一〇〇「職人のトリック」、一〇一「橋の建設」一〇二「洛陽橋」の三話型は全国的に分布する大工・工匠の祖師である魯班伝説である。話の内容は河神とは直接にはなんら関わりがない。魯班が宮殿・寺院・楼閣などとともに橋をつくったというつながりでしかない。(13)「魔法・呪宝・魔法の作品」の中の一八六／一八八にあわせてこの魯班伝説が配列されていないことが不思議にうつるほどである。また見出しの(10)「神々と人間」(12)「神々と仙人」(14)「人間」(15)「英雄と神人」などはなにほども内容を示唆するものではない。

項目見出しの便宜的であることは別にして、タイプの配列および個々のタイプの集約は、エーバーハルトの、中国昔話の全体像と特質の記述という努力を表わし得たものといえるだろう。例えば、三〇「狗耕田」(犬が田を耕す)、隣の爺型、TN 5 0 3 E)、三一「蛇郎」(蛇婿)、鬼婿入型、TN 4 3 3 D)、三二「灰姑娘」(灰かぶり)、TN 5 1 0 A)の三話型が項目をへだてながらも並んでいるのは、三者の後半部がいずれも殺された者の魂の転生のモティーフを共有するという中國的な特質を我々に一目瞭然に理解させ

せるのである。同様なことは仙人譚（道教的説話）や仏教説話の集約の仕方にもいえる。EB索引のこうした便利さは、ATに準拠するTN索引にはみられない。とはいえ、TN索引はその欠点をおぎなうべく、例えば、先にあげたTN510Aの中で433Dに言及するなどの配慮がみられる。

四タイプの記述。EB索引ではひとつのタイプは次のように説明される。

①モチーフによる説の内容 ②資料 ③各要素の異同 ④モチーフの異同

⑤「発端（の異同）」・「異伝」 ⑥「参照（他の話型や外国のものとの関連）」 ⑦「歴史（文献的にどこまでさかのぼれるか）」 ⑧「分布」、という順序で分析と資料提示がなされ、この詳細な緻密な説明は、丁乃通の索引にはみられないものである。

TN索引において、総タイプ数八百四十三のうち三分の一強の二百六十四タイプが中国独特のものという結論が注目される。ここで中国独特というのは、AT番号以外の話型を作ったという意味ではなく、サブタイプのことである。

三、書評と反論

1 爭点のすれちがい

四ページにわたる長文の書評の中で、エーバーハルトはまず冒頭で、丁乃通索引と、それより三十年前に作成した自分の索引とをひき比べる。丁氏は四倍の資料を使い、とくに自分の索引に欠けてい

た少数民族説話に関して四十二種の出版物を利用していると述べる。さらに丁氏が自分の索引に対し何ひとつふれていないことに抗議し、以下、多方面にわたり批判を展開しているが、その順序にそつて私なりにまとめる。と次の五点となる。

(1) 神話・伝説・仏教説話・教訓的小話などの除外

(2) 口承文芸の、特定階層（階級）への固定

(3) 昔話の発生地と伝播経路の安易な指摘

(4) 中国昔話へのAT適用の困難

因最大の欠点としての採集地点の省略

以上五つの批判点のうち第一と第四は両者を関連させて次節で詳述することにして、先に二、三、五をとりあげる。

第二点は、現代中国における口承文芸研究への階級斗争理論の導入に対する批判である。「口承文芸はべつに文盲の農民の財産であるとは限らない。各階層を渡り歩く。」「私は、丁教授のその観点を批判するつもりはない。しかしながら、彼が中国と他のアジア、さらにヨーロッパとの関わりを述べている以上、問題にしないわけにはいかない。」（一三八頁）という発言に対して丁乃通は反論を加えていない。

第三点は丁乃通が索引序文の中で推測した事柄に対する批判であり、索引の内容とは直接しないので、ここではとりあげない。

第五点の採集地点の省略への批判に対して、丁乃通は、(1) 地点は原稿には明示してあったが、ひとえに出版の経済的理由により省略を余儀なくされた。(2) FFCの他の索引もとくに地域の明示ではなく、それに従つたまでである、と答えている。

ヨーロッパ全城よりなお広大な中国に対し、エーバーハルトは、索引の序文で「南中国や北中国という表現は、一覽表にある様な地理的名称ではなく文化的名称である。中国は民族学的なまとまりとして存在するのではなく、数多くの文化地域から成り立っているのである」（九頁）と述べているように、その後の研究で一貫して解明しつづけたところの文化複合体としての中国が、彼の研究姿勢の根底によこたわっている。それゆえに、個々の話の採集地点がいやがうえにも重要な要素となるのは当然であり、彼の指摘もなるほどとおもわれる。

これに対する丁乃通の反論における経済的理由うんぬんは論外として、F.F.C.の他の索引に地名の明示がないからそれに従つたといふ反論は単に弁解にすぎない。結果的には採集地点の輕視となり、その根底には、国家統一体としての中国觀が横たわっているようだ。例えば、エーバーハルトの書評の中の「少数民族において（その大きな地域差があることは）言うまでもない。例えば、著者（丁乃通）は、チベットの説話の伝統は、漢中国の伝統と不可分であるという。しかし、この発言もやはり現実とそぐわない」（カッコ内は筆者）という論点をとりあげて、丁乃通は、次のように反論する。「エーバーハルトの民族史の仮説を共有することはできない」「少數民族が“中国人”あるいは“漢”であることの言語的・歴史的根拠を数多く発見している」「チベットは、数世紀にわたり中国の一部であった」「この地域の昔話資料は、ほかの言語よりは中国語によってその多くが公けにされたのであり、また私のいう中国とは、民族集團というよりは地理的区域を意味する」（八八〇八九頁）

つまりところ、丁乃通の反論においては、国家という政治的概念が、文化や民族の概念に優先しているわけである。採集地点の省略をめぐる批判と反論は両者の研究姿勢の相違によりすれ違いに終っている。昔話研究者の姿勢としてどちらに共感をもつかと問われて、エーバーハルトであると答えるのは、決して私一人ではないだろう。

2 昔話観の相違

T.N.索引が神話・伝説等を除外したこと、エーバーハルトの批判の第一点であつた。その要旨は次のとおり。

「著者（丁乃通）は、神話伝説を除外しているが、伝説はやはり分類問題をひきおこすものである。さらに、仏教説話も除外したが、これは伝説にあり分けて分析すべきであろうし、またインド起源のそれは、僧侶の説教として今日でもなおかつ説かれているものであるから、教訓的小話としての分析が最も重要である。丁教授は、キツネ・魔物・占卜とその儀式に関する話は、“迷信”にもとづくゆえに伝説であると断じて除外しているが、これは彼が共産黨の迷信反対政策にしたがつたからではないか。また彼は、鳥や動物の歌の意味を解く話も“迷信”とみて除外したが、これは、縁子と縁母の葛藤を表わし、伝統的な中国社会のもつ深刻な問題を露わにしており、興味のつきないものである。

また大工や石工の話を除外しているが、この種の話はきわめて多く、職人に対する社会通念を表わし重要である。さらに禹の洪水伝説や太陽・月に關する話もはずされているが、これらは神話

そのものとは言えないのではないか。」

エーバーハルトは、以上、TN索引で除外された話に対し、彼のいわば社会学的な興味から各々の重要性を説いている。後述する如く、丁乃通はその反論の中で、自分の索引は昔話インデックスであるから、これら伝説・神話の類は除外して然るべきと答えていた。それでは、神話・伝説・昔話といった通説上の区分を熟知しているエーバーハルトがなぜ、すでに紹介したように極めて広義なマルヒエンをもって彼の索引を作成したのだろうか。その答は、書評の中でも見い出されるのはなく、彼の索引の序文「対象と目的」の中にも用意されている。第二節「マルヒエンの概念」における次の発言は、筆者などの常々考えるところの代弁でもあり、さいさか長くなるが引用したい。

「中国のマルヒエンにおいては、個々のモティフは非常に不变確固として生命力がありながら、モティフの鎖すなわちマルヒエンそのものは比較的変りやすいのである。ここでマルヒエンに現われたと同じモティフが、あそこでは突然ザーゲに、またシュヴァンクに現われるといった具合である。(中略)マルヒエンの創造は中国においては——従来のあらゆる主張に反して——まだ続いている。(中略)このような側面を切り離し、狭い意味でのマルヒエン的目的をしぼることは、マルヒエンから手足を切り離し胴体のみを取ることである」(四頁)

エーバーハルトは、早くも二十代後半に帰納した、以上のような中国昔話観にもとづいて、書評の中の第四点「ATを中国昔話に適用することの困難」を主張したのである。「たとえばATの例話

(『民間文学』一九五七・三、25~29頁)は一〇五九十一五三六A十二一とあるが、これはその各々をみても少しも話の内容を組み立てることができない。等といふか具體例をあげ、無理に「ひとつ的话を小さな単位に切つてしまふくらいならば、モティフ・インデックスをつくるか、あるいは私がかつて私の索引で用いた方法をとつたほうがよい」(一三九頁)と主張する。またエーバーハルトはここでも「私のタイプ・インデックスについて論じてほしかった」と、残念な気持ちを吐露している。

重要な説話群を除外したという批判に対して、丁乃通は直接的な回答はしていない。EB索引を論じなかつた理由の一つとして、EB索引が伝説・神話・笑話を含んでいたためと婉曲的に述べ、昔話インデックスにはこれらは除外されるべきと主張したまでである。

その主張の中の注に「エーバーハルト教授の伝説概念と私のそれとは明らかに異なる。私は俗信(Popular superstitions)に關わる話を伝説とする一般的定義を受け入れるものである」(八九頁)とある。丁乃通はその索引の序文の中で「伝説」の具体例を次のように挙げている。①キツネ・魔物・幽靈・龍・占卜・占卜儀式などの迷信にまつわるもの、②歴史的または虚構の史的人物や事件に付会した話、③宗教伝説(宗教教理たとえば肉体の再生、因果報応、持戒と破戒、天帝による裁きなど)や神話、④歴史伝説(一頁)。TN索引の表題に「口頭伝承および非宗教的古典文学的主要作品」とわざわざ題した、非宗教的とは①や③の排除を意味するようだ。

さらに丁乃通は「中国の説話から神話や伝説をはがしどることはそれほど困難なことではない」(一〇頁)と言ひきり、エーバーハ

ルトの観点とはきわだった対照をみせている。しかしながら、このような丁乃通の発言は、そもそも彼の依拠するATが対象とするフォーケティルの範疇と抵触するのではないだろうか。ATの「宗教的な物語」や「ノヴェラ」と丁乃通の伝説概念との間に境界をもつてることとはまさに至難の技である。例えば、次のような例は多い。彼の索引の八二五A*、「疑心によって起きる予言された洪水」は、最近の漢族の資料によれば、主人公を古代神話の盤古に付会したり（兄妹婚型）（注13）、通俗道教の呂洞賓を登場させる（注14）。また、その中のいわゆる城門の血や獅子の眼が赤くなるといったモティーフは丁乃通の定義では迷信・俗信になるわけである。

丁乃通は、さらに序文の中で次のように述べている。「西洋の民俗学者の間にひろまっている誤解（歐米と中国とは説話が全く異なる）は、中国の神話・伝説・逸話（アカドー・メルヒエン）として紹介したことによってもたらされたものである。（動物昔話と笑話に関しては誤解はおこりえない）¹不思議な話（ワング！ティル）の中で、昔話のみを対象とし他のジャンルを除外したインデックスを通してこそ、中国の説話は国際的視野のもとに真に理解され研究されるのである。」（一〇頁）

この発言は様々な矛盾を含んでいる。丁乃通のいうメルヒエンは結局狭義のメルヒエンを示し、ATの「魔法の話」のみを示すことになり先述のごとくATが対象とするフォーケティルの範疇とは矛盾する。ひいては彼が作成した索引そのものとも合致しないのである。彼の主張は裏返していえば、『彼の索引がATという座標軸の機械的運用』であることを物語っているのではないだろうか。彼の作業は、結果的にはそれこそエーバーハルトが危惧したように「狹

い意味でのメルヒエン的をしぼることは、メルヒエンから手足を切り離し、胴体のみを取ることとなる」のである。換言すればAT基準のTN索引は、中国昔話の全体像や本質、特質を私達に理解させには非常に遠まわりなルートといわなければならず、逆に欧米の昔話との比較（類似）には極めて便利なルートではある。

中国という巨人が昔話の集成と分類にむかって再び歩みはじめている。あまりの巨体ゆえに第三の話型索引の姿形は、私の貧しい想像力をはるかに越えるものであるが、やはりEB索引が重要な出発点になることは確かだろう。また日本の『大成』や『通観』、インドの話型索引などがひとつのが根拠となることだろう。

またエーバーハルトのいう、説話の各ジャンルをとび歩いて新たなメルヒエンを創造してやまないモティフ（あるいは挿話）の索引作成も中国昔話の解説には急がばまわれの早道のように思われる。私には格別の興味をかきたてる課題ではある。

なお、中国においてTN索引は中訳本が二種類も用意され、さらに寛解される中で、肝心のEB索引にかぎって訳出もされないまま、ある種の批判にさらされているのである。賈芝論文（注15）に代表されるように、エーバーハルトの中国への批判的な言動を問題として、NB索引まで否定しようという動きは、いわゆる政治主義のなごりというしかないのである。

【注】

1、春風出版社版の中訳本は各話型の文献が各一例しか訳出さ

- れでないため、索引の用をなさない。また翻訳がかなり粗略である。ちなみに序文の訳文に矛盾したといふが多く念のため原文と対照させたといふ、筆者が気づいたといふでは、大小の誤訳が十ヶ所、訳の脱落が二ヶ所あり、また用語に対する配慮が全く見られない。
- 2、劉守華、一九八六「故事学的春天」『民間文学論壇』五期一〇頁。
- 3、S. Allan & A. P. Cohen (ed.) 1979, Legend, Lore, and Religion in China: Essays in Honor of Wolfram Eberhard on His Seventieth Birthday. San Francisco: Chinese Materials Center.
- 4、趙景深、一九八一「中國民間故事型式発端——英國譚勒研究的結果」『民間文学叢談』一九八一、湖南人民出版社一四七—一五一頁。
- 5、『旅と伝説』一九四三・一
- 6、馬昌儀、一九八二「鍾敬文著訳（民間文学方面的文章）分類目録（一九一四—一九八二）」（未發表原稿）
- 7、『開展』一九三一年十・十一期（のちに『民俗学雑誌』一輯に所収）
- 8、日本民俗学会『民俗学』五卷十一号、一九三三、なお、日訳には二種類あり、もう一つは注6の角川源義訳。両者は序文が異なる。
- 9、加藤千代、一九八四「鍾敬文の日本留学」『人文学報』都立大学一六六号、第三章参照。
- 10、「關於民間文学的一封信——致鍾敬文先生」『芸風月刊』一卷九期、一九三三・一一、一三四—一三五頁。
- 11、鍾敬文「中国民間故事類型索引」序」『民間文学論壇』一九八六年一期、六〇頁。
- 12、金子「丁乃通教授第四次訪華」『民間文学』一九八五年十二期、二八頁。
- 13、「盤古山」『河南民間故事』河南師範大学中文系編、一九八二年八月、四六—五二頁。
- 14、「岳洞賓東都壳油」『八仙的故事』一九八三、浙江文芸出版社二八一二三頁。
- 15、「打開中國民間故事豐富的宝庫——『中国民間故事類型索引』序」『民間文学』一九八五年一二期。（かじか・ぬよ／愛媛大学）